

夏肥施用と後期重点摘果による温州ミカンの高品質栽培技術

淡路地域の温州ミカン経営では、もぎ取り、オーナー制、直売といった消費者と対面した販売方法が広がっており、果実の高品質安定生産が求められている。そこで夏肥施用と後期重点摘果を行ったところ、果実糖度が高くなることがわかった。

内 容

肥培管理は春肥と秋肥の年2回施用する「慣行施肥区」と、春肥と秋肥を減らし夏肥として6月下旬に窒素成分で4kg/10aを施用する「夏肥施用区」を設定し、いずれも窒素成分で年間20kg/10aとなるように施用した(表1)。なお、夏肥は樹勢維持や隔年結果軽減を目的に施用するが、着色不良や浮皮の増加といった品質低下につながることがあり、施用しないことが多かった。摘果については、7月下旬の粗摘果で全摘果量の80%を摘果し8月下旬までに仕上げ摘果を行う「慣行摘果区」と8月中旬の粗摘果で全摘果量の20%を摘果し、9月中旬に仕上げ摘果を行う「後期重点摘果区」を設定した。試験区はこれらを組み合わせた4区を設置し、収穫果実の品質について調査を行った。収量はいずれの区も同程度となるよう摘果量で調整した。

果実重については、後期重点摘果区でやや小さ

くなる傾向があった。果皮色、浮皮、果肉歩合、酸含量については、処理による明確な差は見られなかった。糖度については、「後期重点摘果区」が「慣行摘果区」に比べて明らかに高く、果実の食味も優れていた。なお、夏肥施用の果実品質への影響については、いずれの摘果方法についても明らかな差は見られなかった(表2)。

今後の方針

後期重点摘果は樹体への着果負担が大きいことから、夏肥施用の有無が収量や隔年結果へ及ぼす影響について確認していく。

宗田 健二(淡路 農業部)

(問い合わせ先 電話:0799-42-4880)

表1 肥培管理(窒素成分kg/10a)

肥培管理	春肥 3月下旬	夏肥 6月下旬	秋肥 11月上旬	計
慣行施肥	10	—	10	20
夏肥施用	8	4	8	20

表2 夏肥施用及び摘果方法の違いが果実品質に及ぼす影響(品種:宮川早生、2012年)

試験区		果実重	果皮色	浮皮	果肉歩合	糖度	酸含量
肥培管理	摘果方法	(g)	(a値)	程度	(%)	(Brix)	(g/100ml)
慣行	慣行	111.4	28.3	0.3	79.8	10.3	0.77
慣行	後期重点	108.3	29.4	0.3	80.2	12.0	0.68
夏肥施用	慣行	112.9	29.0	0.2	81.0	10.6	0.72
夏肥施用	後期重点	106.0	28.7	0.1	80.5	11.9	0.73

注)果皮色は測色色差計(日本電色工業製 ZE-2000)による測定値

この値が大きいほど赤みが強いことを表す

浮皮程度は無(0)、軽(1)、中(2)、甚(3)の4段階評価の平均値

果肉歩合は(果肉重/果実重)×100で算出